

## 宿駅一日市

慶長7年佐竹氏の藩政下に組み入れられてまもなく、藩では羽州街道の整備にとりかかり、筑紫岳が直接八郎潟岸に追って交通を遮断していた三倉鼻の開削工事に着工した。街道に沿う一日市村は、中世の三斎市に由来をもつ名を負っているように、古くから交通の中心地であったが、寛文2年(1662)駅場の認可を得た。このとき蒲沼・押切2か村を併合し、さらにのちに御役屋も設置された。元禄9年(1696)村内76軒のうち52軒が焼失したように、たびたびの大火に悩まされたが、近世を通じて発展の一途をたどっている。馬場目川の舟渡しと鹿渡までの羽州街道維持を分担し、潟から五城目を経て阿仁・比内・仙北に通ずる脇街道の起点としての役割をもつ要地なのであった。一日市村は寄郷10か村を統轄する親郷にもなる。

## 百姓と戸村堰

藩の村落制度下の行政村について、17世紀末以後の当町関係分をみると、親郷一日市村の他に、その寄郷に位置づけられた夜叉袋・真坂・浦大町・小池・川崎5か村がある。中世村落統合の背後には、激烈な開発があった。特に当町の開発で特筆されるのは、百姓層の治水工事への取組みである。藩政施行後ただちに佐竹給人の中川・戸村・梅津・真崎各氏らが相次いで当町域の指紙開の許可を得ているが、部分的な成功にとどまっていた。これに対して、寛永3年(1626)頃夜叉袋の百姓長左衛門以下の衆が水路開削を企画し、清源寺住職光山和尚の援助を得て、当時指紙開の特権をもっていた戸村十太夫の許可と援助のもとに、五城目村内の馬場日川から分水し、夜叉袋に至るまでの土地に引水することに成功した。これによって新田開発は進み、一日市村支郷中島村など新村も成立した。享保15年(1730)の6か村合計戸数422軒(享保郡邑記)、寛政6年(1794)の合計村高2、529右余(惣高村附帳)、「天保郷帳」2、777石余である。フナ・シラウオ・ボラなどの潟漁も盛んであり、馬場目川ではサケ漁もなされた。寛政6年久保田肴町町人が導入したという氷下漁法が、まず一日市村で試

みられたのは、この村の山村長九郎の強力な働きかけがあったからである。潟漁への積極的姿勢を知ることができる。

## 願人踊

6個の力強い太鼓の音と笛に合わせて踊る一日市の盆踊は、御伝馬開設の頃に組織化されたという。かつては「袖子踊」などといって、手振り足さばき多種多様な踊りがあったが、現在ではテンポの早い「でんでんづく踊」「きたさか踊」が残り、県内三大盆踊の1つに数えられている。

また、無形文化財の一日市願人踊は、高岳山副川神社の祭事であり、古くから伝承された豊作祈念の踊りに伊勢音頭の踊り方と定九郎の狂言を取り入れたものと伝えられている。伝馬開設といい、式内社副川神社(もと神岡町)の高岳山への合祀再興といい、藩の政策が先行するが、それを同化した村民のエネルギーが踊りに燃え上がるのである。

## 〔近現代〕

一日市町と面潟村廃藩置県後、明治6年大区小区制では秋田県第1大区第11小区に編成。同11年商秋田郡成立後、一日市・小池・川崎および野田を組み合わせ、同じく真坂・夜叉袋・浦大町および浦横町を組み合わせ、おのおのに役場を置き、同22年市制町村制施行に伴い一日市村(大正14年町制施行)・面潟村となった。

明治18年馬場目川に竜馬橋が架橋、同35年国鉄奥羽本線開通に伴い五城目駅(大正15年一日市駅、現在八郎潟駅)が開設されて、人々の往来にいつもの便を与えた。

よしやち  
葭谷地事件

地租改正施行後、潟岸の砂洲や葭の繁茂する地帯の所有と開発をめぐる問題が発生していたが、明治22年の新村誕生後、村人を対立の坩堝に巻き込む一大事件となり、大正12年の和解まで当地方に大きな影響を与えた。

この騒動のさ中、畠山松治郎らによって社会主義思想も導入され、大正9年三倉鼻で赤光会が結成されている。一日市町の全耕地中70%が不在地主の所有地であり、大正14年一日市小作組合を結成、